

我慕李王孫。驚才無等倫。囊盛心血滿。筆吐鬼神新。不作世間語。果然天上人。好賢糸糸續。常將沈水熏。

諸孫有七歲。名既動京華。肝眼空千古。呕心成一家。鬼雄脫鉄馬。雷母掣金蛇。追逐無由及。汗流徒自嗟。

自写小景

偶尔弄枯筆。尺口踈墨融。小亭倚幽竹。孤磴压遙空。信手不藏拙。奇懷寧任工。書無作家氣。聊當沒絃琴。

極雨

猛雨洗溪石。石苔滋綠紋。一汀城返照。半嶺尚浮雲。余滴樹間響。新流沙際分。風吹濕煙散。晴鳥一聲聞。

秋夜涼風起

江城疎雨余。風起行雲白。夜色万家涼。秋空千里碧。短檠猶可親。輕簟方堪獻。处处倚樓人。非關明月夕。

七言古詩

苦吟行贈人二首

先生吟髮白于雪。漫誇錦囊富新篇。牢騷二十有餘歲。誰憐窮巷老詩仙。皺眉搖膝耽佳句。家徒四壁寒蕭然。吐出肺肝長自苦。千章不直一文錢。嗚呼奇語驚人竟底事。自苦鬼神忌才子。君不見東

小才子揮毫。百斛明珠。青年卓犖思不群。日光射人如流電。牛城狂生久落魄。滿眼悠悠皆俗客。心事平生向誰道。與子相逢言不早。休言天下無知己。子今知我我知子。叢桂園中文字飲。醉眼相看有靈氣。莫道誰進孟與韓。願子為龍我作雲。萍跡飄飄東復西。相逢安得不相離。金蘭簿。空題名。我愁明日河橋別。幾時重唱相逢行。

南軒苦蘆歌

苦蘆漸密不通鳥。蘆居終日俗聲少。風入幽叢作驚嘯。涼陰滿地無塵氣。添得苦代刷蒼翠。細細古香吹不已。坐使主人爽心骨。朗吟相對双眼碧。

画湘竹歌

湘江雨竹孫生孫。叢叢長伴双娥魂。千年古恨恨未已。點點猶凝淚血繁。翡翠旒影區區空。月風敲佩響玲瓏。驚起眠龍無處尋。涼潭一夜幾怨吟。

磨刀歌

我有昆吾堪刺鐘。三尺古波泣鬼工。玉裝凋零不復佩。壁壘埋却一眠龍。龍身久藏龍文昏。紫花猶泣冷血痕。十年重磨醒龍魂。光怪夜迸放精奔。今遭万里戰塵靜。我且持此照身影。夏天雲黑雷雨垂。只恐蛟螭破匣飛。

醉歌 或作六龍

九鳥墜。六龍奔。羲和昼夕執鞭策。勾芒既難駐花魄。尋收容易斷柳髮。天吳駭海綫回移。龍鬚冬曉無休歇。箬人勸我千日酒。沈算常笑神仙客。解餽黃金白玉。不解斬龍食龍肉。瑤池水涸蟠龍死。鸞台玉髮無前綠。郭香香骨久枯朽。朔兒饑魂啼脈脈。

杉木酒器歌

誰截千年木龍子。龍骨剝為盛酒器。龍髓已枯漆花膩。龍氣全消只酒氣。碧錦寓生真好事。得之長伴醉鄉裏。木龍不須悲身死。琥珀香濃骨常醉。

柵城訪古歌

怪鳥嘯松聲咄咄。松陰苔蘚印狐跡。我來訪古入殘郭。酸風吹日日光薄。黑石古書半欲滅。牽攀斷鐵欽花赤。陰氣淒淒凋草髮。冷紅泣露凝幽血。酒瓢倒尽陳短草。愁雲压空空無光。燭光熒熒灼青雨。千年恨骨還中語。

諶荷花

夢雪收尽晚江白。宝靄滿肌香銷薄。紛紅半落嬌香在。夜來瓊佩為誰解。睡起凌波步未試。鏡中點點燕脂淚。謫笑錦鴛未云幾。鯉魚風冷芳魂死。

上昇詞

女羅衣。女魚鱗。九節蓮清幾度餐。目瞳既方骨髓腎。天人寄字龍蛇形。身騎蒼鹿踏雲昇。人間歌哭小虫聲。虛空風氣何清冷。拳頭往往見飛輪。蓮華麻姑問滄桑。笑指飛塵青茫茫。

老仙謠

石山石爛海塵起。海上仙人悲哀裏。系毛斷絛方瞳昏。們空幾矢朝天路。驚坐粉黛不堪吹。十二樓頭逗秋雨。碧霞日冷琅玕死。覆鳳鸞啼不肯舞。欲借瑤草荒青田。衰龍無力耕新煙。日暮空雲愁不度。哀歌又就蒼霞侶。

回火車

火輪輒雲雲不流。夜叉夜吼聲如牛。牛頭瘴瘴色嗔怒。載將新鬼挾輓去。新鬼嗷嗷火中哭。渾舍鷲
細紋不得。拳頭瞪目雲如皂。火光漸沒哭聲小。

狐嫁辭

雌風吹雲弄陰晴。阿紫嬌娘來受婚。高高双耳揚玉鬚。脩尾搖曳金糸裙。郎家穴塚雙洞房。老妖吹
焰花燭光。歸隱為伴合歡卮。風竊為歌撒帳詞。綢繆一夜約千載。生前同穴亦可喜。苔花粘体綿繡
熟。石膏支頭漏瑚紫。

画飛梅万点破月梅梢翠羽繞枝

破鏡橫飛殘夜白。神娥長立嬌影薄。珮珠貫斷任零落。仙郎一別幾時遇。深烟悵空悄不語。人間塵
土難久住。高樓画角一聲起。么鳳啾啾寒兔死。八姨相將去何處。飛香走玉撲天地。

代悼亡

瞳人剪水髮盤霧。一尺纖腰掌中舞。鸞雲双月關眉嫵。白玉肌香染衣縷。買得艷春錦花貯。那知艷
春難久住。一朝解語花不語。香魂已逐仙娥去。紅蘭夜泣燕脂露。金細綺繡空塵土。茫茫愁月弔離
苦。媽香未歇翠衾素。瓊瑤台邊不知處。招魂無術涕零雨。

贈求書人

空郎字癖過詩癖。不論楷素佳与惡。興來一揮風雨快。龍拔躍起陶家壁。不能巧媚隨時俗。奔取直
追田水月。有神無法君莫猜。我亦字林一俠客。

鳳尾竹歌

比君高不過三尺。此君枝幹珊瑚枝。細葉參差何倚那。小鳳抽尾弄生翠。瓦盆種得足佳致。細細查

伝書幌裏。何以為伴一石筍。奇臂婉婉青龍。

秋郊鬼風謠

鉄蒺藜沙鬼風吹。鬼雄夜起飛殺機。叱咤一聲風助威。吹出怪雲作黑旗。鉄馬隆隆幾万蹄。矛刀閃月殺声來。陰郊秋夜盛鬼氣。直際霸體欲躍起。土妖木魅慘無声。飛露點身凝血腥。鬼風欲死渠方白。鉄馬踏空去無跡。

夢天二首

飛魂乍作飛仙去。欲朝三十六帝所。呵叱小龍走高碧。月風吹露冷玉骨。天鷄一喔破陰翳。飛光倒射龍翼紫。垂轡一息銀雲表。笑看九点齊州小。瑤京賜宴醉月色。鬼仙相看眼不白。云君早晚來同住。白玉樓臨桂香陌。燕罷雲童扶我下。扶桑欲出扶義扣馬。滿腹仙漿紅琥珀。吐作仙霞向空渴。

空郎哀

空郎哀。空碌碌。少年意氣凌空綠。裁詩不解隨時俗。每嘔心血逐昌谷。奇特儻教幽鬼哭。老龜擊鼓蕩鱗屋。龍姬起舞腰一束。鮫人織綃光深淥。墨魚吹涎樓影曷。阿杏疾驅車折軸。翻飛紅燕穿銀竹。蘭香走天呵白蕤。踏霧歸來門撼玉。古書平黑石。古血冷斷鐵。陰磷燃雨搖翠燭。觸震起語土坎默。金釵客醉烏程醉。嬌歌相勸驚声統。金鷺穿風挂絲服。小玉承歡歡未足。枕花紅濕蜀烟靨。嘔出心血不知息。霜剪吟髭青鬢短。心血漸枯嘔不得。筆尖鬼花老無色。何為寵眉長蹙蹙。從今有句無奇特。一任幽鬼笑咄咄。

五言古詩

北山田中行

瑟瑟冢花紫。煙拍橫愁翠。驚車何處來。驚起老鴉睡。今夜夜已開。漆燈引新鬼。咽咽人歸去。光露代垂淚。

秋夜

桂花吹冷香。霏霏漏幽戶。今夕荒山月。木客嘯何處。月露洗空草。月色正清苦。風搖老藤影。蛩蜩鼓驚舞。

又

兀兀耽苦吟。吟骨老幽素。今夕陰庭冷。竹暗秋登雨。飛蛾撲燈死。虛室神靈舞。牆南柏杳涼。蔓兔夜添語。

以上である。二三、文字に疑わしいものがあるが意改しなかった。

日本の詩人で、李賀のいわける怪奇処をこれほど景模しえたものはあまりあるまい。中島米華と明石秋室と、いずれが先輩であるか、前引の小伝だけでは知ることができぬ。両者になにがしの交渉があったかなかったか、それらはすべて今後のことにしたがう。

ところで、李賀を慕ってその怪奇を学んだ秋室や米華の怪奇詩が、李賀の詩のもつ凄冷をわたしに覚えさせないのはなぜだろう。やはりその源泉がちがうのではないか。

秋室の作品を読み、小伝の述べるかれの平生を事実に近いものとしたとき、かれにかぶせる評語としてびたりするのは唯美主義者であろうか。もしそう言いうるとすると、秋室のような

景慕者を多くもったために李賀その人まで唯美主義者と見なされるようになったともいえなくはない。

秋室の詩は李賀の詩のある一面と似すぎるために詩として高く評価できず、その作から推測しうるかぎりでは李賀の世界を狭く限りすぎた感があつて理解者としても果してどこまで持ちあげてよいか迷う。けれども、たぶんかれは詩人としておのれの作を世にのこす気も、研究者としてその探求を宏深にする気も、あまりなく、好きで好きでたまらぬ李賀の詩におのれを近づけさせればそれで満足した人かもしれぬ。詩という幻の世界を支えているのは、学者でも評論家でもなく、秋室のような無名の読者の詩であるような気がせぬでもない。

(一九七五年十二月十六日)

△雑記 87 V 漱石と李賀

1975.12.17

和田利男氏は一九七五年八月二日付手紙で次のように示された。

夏目漱石の著作中には李賀の名が見えて居りませんが、ただ「七草集評」の中に「古人有句云、天若有情天亦老」の句が引かれて居ることには既に御承知の事と存じます。また同じ頃の和歌に「情あらば月も雪井に老めしかはり行く世をてらしつくして」というのがありますが、これも石の李賀の句の翻案と思われるかもしれませんが如何でしょうか。漱石文獻中明らかに李賀の影響と見られるものは以上の二例しか現在のところ気づいて居りませんが、……

八月八日付のはがきでさらに次のように教えられた。

「天若有情」の引用は昭和四十二年刊岩波版漱石全集第十卷四五六頁「七叶集評」中に、「情あはれ」の和歌は同巻四六三頁にあります。念のため。

この示教によつて全集を見ると、和歌は明治二十二年九月作「対月有感」二首のその二で、その一は八蓬生の葉末に宿る月影はむかしゆかしきかたみなりけり、で、「七叶集評」は同じ年の五月二十五日作。「七叶集」は正岡子規作である。

漱石の全集は盛行しているから、紹介としては右の和田氏の周到な二文で要を尽している。ただ「七叶集評」はいい文章である。また明治二十年代の李賀文献として、中野道達の「偶感」一首と共にわたしの覚書中に保存したい。

詞兄之文情優而詩聲清秀超脫以神韻勝憾間有蕪句鄙言然昆玉微珎何須凡工下手且先輩評論備至故不敢贅至若韻語僕所不解只覺首首皆真況讀之身如起臥墨江耳痴人夢後雖情景歷歷在目不能語人要任心解不必要多舌也茲篇則筆意悽惋文品亦自高詠去不覺黯然嗚呼天地一大劇場也人生如長夢然夢中猶辨声色非優能泣人傑談此篇雖知其出假想然不能無酸悒之情況於身在其境目睹其事乎抑人事之變系滄之遷誰辨其真反曷知吾兄十年之後無再遊墨江追憶往昔悟先之反為後之真昔之幻為今之真徘徊顧望感極而泣下者乎哉又曷知春雲暖雪之下無不勝今昔之感作詩弔阿花忽忽若失捧詩嗚咽者乎哉葛篇則一氣奔放縱橫敘去毫無難淡之体議論亦奇特僕輩所不能夢視至瞿麥之篇則自口碑裏伝至神史小說細大無遺洪纖不漏悉取焉而抒自家胸臆可謂巧矣不知吾兄校課之余何暇緝綽能如此僕天資陋劣加疎懶為風韻誤沒于紅塵裡風流韻事蕩然一掃愧于吾兄者多矣刈萱之篇評存而文缺焉思吾兄才思富贍一唾一珠故割愛不顧乎可惜可惜古人有句云天若有

情天亦老月如無恨月長圓欲移評刈萱而不能此日得一讀知余言非野書燕說則幸甚憂之大著七篇皆異趣同巧猶七草不同姿態而至其沿澗倚籬細雨微風楚楚可愛則一也恐愛翫之極小人抱玉之罪因勿勿通讀奉還榻下拙作數首附記供瀏覽僕固不解詩故所作粗笨生硬可笑然無垢与面施坐則美益美而醜愈醜僕豈謂敢微輩亦欲為面施之美耳

このあとに七言絶句九首をそえるが割愛する。「天若有情天亦老」が李賀の「金銅仙人辭漢歌」の句であることはいうまでもない。「月如無恨月長圓」は宋の晏卿石延年の「對月」詩の句、宋の司馬光の『温公統詩話』（歷代詩話）に「李長吉歌天若有情天亦老、人以為奇絶無對、晏卿對月月如無恨月長圓、人以為勑敵」といひ「增修詩話總龜」卷一三に引く「古今詩話」が「李長吉歌云天若有情天亦老以為奇怪無對石曼卿云月如無恨月長圓」といふ。漱石はあるいは詩話によつてこれらの句を知つたのかもしれない。

中野道達については拙稿「中野道達」（近刊『人文論叢』二四号）にのべたのでくりかえさぬが、李賀にかかわる詩の製作は明治二十七年。八仙才直駕李長吉（本田種竹）といわれた宮崎宣政の『晴瀾焚詩』の出したのが明治二十九年。明治二十年代には李賀の詩が流行的に読まれたらしく、そのなかで漱石もその態を披見したのかもしれない。

▲雑記 88 V 二〇世紀の寺澤（五）漆山又四郎・蒲邊

一九七五年五月二十一日消印の箱田尹氏からの来簡中に次の記事があった。

漆山又四郎訳註本は註文品切の爲め 昭和十四年頃発行所を尋ねましたところ 親切にも何処からか一冊探してくれ 確か代金はとらなかつたような記憶があります

1975.12.18

杜甫の「得舍弟觀書自中都已達江陵今茲暮春月末行李合到夔州悲喜相兼園田可待賦詩即事情見乎詞」は「兩門江陵府に到ると、何れの時にか夔州に到らん。乱離生別るる有り、聚散病まきに寒けなるべし、颯颯啼眼開き、朝朝水樓に上る、老身須らく付託すべし、白骨更に何を力聚えん李賀の「蘇小小歌」以前に「啼眼」の語を用いた一例で、いまのところこれ以外の例を知らない。

▲雑記・90▼ 死

1975.12.18

吉本隆明『共同幻想論』を読んで次の二条にぶつかったとき、「蘇小小」の注にしうるかもしれないと思った。

△△△に象徴される男女の対幻想の共同性は消滅することによって（民謡では女が鉈で殺されることによって）しか共同幻想に転化しない（P.90）

人間の自己幻想（または対幻想）が極限のかたちで共同幻想に△△△された状態を△△△と呼ぶ。（P.113）

このほか、ユング、エリアーデなど二三年ほどの間に乱読した書物のなかにも、いくつか、「蘇小小」の使えは便利な記事を見出し書きぬいてあったが、結局、使わなかった。これら思想家や学者の構想力に感心するが、それらの構想力が見出した理論によって中国のたましいの流れを美しく裁断するのではなく、その理論をあてたらはみ出すところに中国の本質がこぼれおちていはいせぬか、というまわりくどさを、わたしはみずからの方法としたい、と思ったからである。吉本の論文は慎重で、理論適用の範囲を注意がく限定することを忘れない。おそらくユング